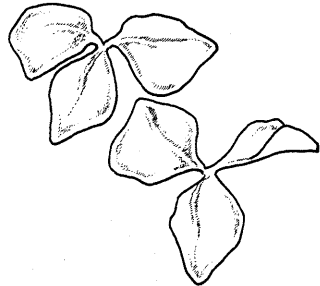


『新しい人よ眼ざめよ』

— 大江健三郎 ふたたび —

本 田 和 子



☆—お父さん！ お父さん！ あなたはどこへ行くのですか？ ああ、そんなにはやく歩かないでください、話しかけてください、お父さん、さもないと僕は迷い子になってしまおうでしょう— W・ブレイク 『失われた少年』 『無垢の歌』より

「おくれてきた人」である子どもは、置き去りにされる不安に常に脅えつつ、暗い森をさまよい歩く宿命を、避け難く負わされているのだ。「子ども」に近付き、彼らについて何事かを語る行為は、まずはこの痛みのある共有の上に成立すべきものに他ならぬまい。

暗い夜の森で、子どもは露に濡れて泣いている。行方を見失った父親を求めて……。森の闇に露は濃く流れて父の姿を覆いかくし、なきじゃくる子どもの肩を冷たく濡らしている。

大江健三郎著 『新しい人よ眼ざめよ』と題されたこの作品集、父親と障害を持った子どもとの限りなく美しい共生を描いた物語群は、W・ブレイクの右の詩篇をモチーフとして一篇を冒頭に置いて、作品世界の幕を開けた。

そして、ブレイクの『無垢の歌』と『経験の歌』は、七つの連作を貫流する主旋律である。それは、子ども心の奥底に潜む「子どもへの想い」を不断にかきたて、共鳴し合い、それらを増幅させて、宇宙の極みまで無限に鳴り響く聖なる楽の音へと、変貌させようと迫るのだ。作品集の冒頭を飾る一篇は、

「無垢の歌」「経験の歌」と題されて、まさしくブレイクの詩集そのものを表題に選び、ブレイクとの抜きさしならぬ深い結び付きを歌い上げていた。十八世紀英国ロマン派の一詩人、子どもの「無垢イメージ」の源流に位置するこの人こそ、いま、共に聖なる楽音を奏し合う、またとなき共演者なのだ……。

——拙稿『幼児の教育』第八十三巻第一号より——

右のような文章から筆を起こして、本誌上に『新しい人よ眼ざめよ』を紹介したのは、一九八四年、作品刊行後の間もない頃であった。発表当初から世評に高かったこの作品群を重々しく取り上げることにはためらいがあるとしながらも、あえて拙い短文を弄したのは、子どもおよびそれに象徴されるものろることどもと、共に生き

ることの栄光と悲惨とが余りにも美しく、かつ重く、歌い上げられていたからである。

そして、私は、前記の引用文の後に、次の一文を続けている。

☆ そして、最終篇「新しい人よ眼ざめよ」は、ブレイクの予言詩『ジェルサレム』の中の、イエスとアルビオンとの確信に満ちた美しい会話から、一節を引くことで結ばれる。

——惧れるな、アルビオンよ、私が死ななければお前は生きることができない。しかし、私が死ねば、私が再生する時は、お前とともにある

重い障害を持った息子との、苦難に満ちた共生の歩みの中から、こうした再生の希望が導き出されたことで、作品世界は、とりあえずは一つの関門を通過した。そして、二十歳を迎えた障害児と、小柄な体でさりげなく、しかもしっかりと兄を支えるその弟に、次代を託しつつ自身の老いへとまなざしを向け

る父親、この三つのまんじの放つきよらかな残光に彩られつつ、作品世界の幕は莊嚴に引かれるのである。

——前出——

◇

いま、大江健三郎作品は、世界の檜舞台上に上げられ、国際的榮譽というめくるめく脚光を浴びて、賞賛のまなこで見つめられつつある。そして、長らく氏の作品の源泉であり続けたこ子息も、作曲家としての順調なデビューを祝福されている。いかにも幸せそうな氏の笑顔と、懸命に見える謙虚さで己を引き締めつつ、しかし、包み切れぬ喜びを口にする氏の声音は、久々に出現した爽やかで快い光景として、私どもの耳目を十分に楽しませてくれた。氏の作品への親近度、あるいは好き嫌いは別として、多くの人々が、この一家に訪れた幸せに拍手を惜しまなかったことだろう。

ところで、氏は、受賞を記念して行われたあるインタビューのなかで、次のような言葉を口にしてている。「自

分は、光（障害を持った氏の長男）の大きさを、まだ、十分には描き切っていないのではないかと……。「自分は、鈍な人間であるため、本当のことに気付くのが遅いのではないかと……」。氏が言いたかったのは、障害を持った長男の内部に何が秘められ何が熟成されつつあったかに、気付くのが遅かったしそれを描き出すべく言葉の力にも乏しかったということらしい。

この発言は、確かに感動的であった。そして、このインタビューが公開された時、作曲家大江光の、あの清冽で静謐な、あたかも天から降り注ぐ声にも譬えられる楽音を想起しつつ、氏の言に納得させられた人も多かったことだろう。

しかし、ここで私どもは、一步立ち止まって、この言葉の意味を問い直すべきではないか。もし、氏が口にした「息子の大きさ」という言葉を、「大江光の作曲家としての成功」を意味すると見るなら、そして、私どもが捕らえられたのが、そうした解釈に裏打ちされている感動だったとすれば、それは誤りではないかと思うからであ

る。氏が口にした「大きさ」という言葉は、単に、彼ら障害を持った人たちが、たまたま、成就し得た仕事の量や質だけを問題にしたものではあるまい。なぜなら、障害を持った人の存在の価値は、彼らがその生涯で発現し得た「見える形の仕事」によって測られるものではないだろう。ましてや、その仕事で成果を上げ得たとか、衆の賞賛を浴び得たということで、価値の上下が云々されるべきでもないと思うからである。

もちろん、大江氏が、息子の才能に瞠目し、父親として大きな感動と喜びを味わったであろうことは想像に難くない。そして、私も、氏を見舞ったこの幸運を、多くの人々とともに喜び拍手することは人後に落ちないのである。ただし、仮に、光氏が作曲の仕事に手を染めず、洗濯挟みを作る福祉事務所の作業だけを楽しんで日々を過ごしていたとしても、果たして、大江氏は「彼の大きさを十分に描き切れたのか、否か。文壇や論壇の評価は別として、氏自身は受賞の喜びのなかで、恐らく「描き切っていない」と述懐したのでなからうか。

私は、前述した作品紹介に際して、拙文の副題を次のように付けた。すなわち「絶望の時代に希望を見る」と……。そして、この短文を次の一文で結んでいる。

☆ 父は、ブレイクの詩句を借りて、「眼ざめよ、おお、新時代の若者らよ！」と叫びかけつつ、一つの幻を見ている。新しい時代、しかも、決してバラ色とは言い難い凶々しい核の時代に、凜然と額を上げて立つ息子らの健気な姿を……。

このとき、私ももまた、この父のまなざしを借りつつ、暗い絶望の時代に、一条の希望を見ることになるのである。

——前出——

時代の良心と目され、その役割を銜いもなく全身で引き受け続けてきた作家大江は、周知のように、一方の足場を「核」に置き、今一つの足場を「障害を持った息子」に置いていた。そのどちらも、避けて通ることも、また単純に克服することも、困難な問題に相違ないが、それらに真っ正面から取り組み続けることを、彼は、自

身の生のありようとしていたのである。その誠実さに、熱いまなざしを注ぎつつ賛同支援する者たちと、それを暗く重過ぎると避ける立場と、読者の評価は二分されていたが、彼の模索が、絶望と見えるものなかにこそ希望を見ようとするそれであるとは、大方の認めるところであろう。

そして、氏のこの立場は、仮にノーベル賞受賞というめくるめく栄光に包まれた現在であっても、いささかも変わり得るべくもない筈ではないか。



大江作品において、「障害児」は、単なる作品の素材ではなかった。いささか旧聞に属するものの、川本三郎の評言を次に引こう。「大江は他者として弱者を描いているのではない。自己⇨弱者を描いているだけなのだ。誤解を恐れずにいえば大江は、自身、ひとりの大きな幼児なのである。」「大江の作品はどんなに理的で、どんなに最新の知の意匠を帯びていようが、それらの理性

は、幼児のコスモロジカルな感覚、身体感覚によって容易に乗り越えられる。リアリズムのいじましい法則の彼方に、神話的と呼んでいい豊かな空間がひろってくる。」（川本三郎「無垢なるものの『きらめき』と『限界』——大江健三郎論」『同時代を生きる「気分」』）

自らが弱者を引き受ける、というにまして、自らが弱者そのもの、子どもそのものである……。確かに、大江作品において、脳に障害を持つ息子と父との共生が語られる場合、作品世界の父と息子は、あたかも一對の一卵性双生児のようにすら見える。このことは、川本の評言の正当さを、何よりもよく証しするのではないか。

生産性という近代社会の価値基準のなかでは、訳に立たない厄介者に過ぎず、息を殺して生きていくしかない障害児たちの痛みは、大江自身の肉体と魂の痛みに他ならない。彼の作家活動は、息子に勝る言語表現能力を与えられたものとして、その痛みを形を与えるための営みであったろう。

その「言葉持たぬもの」と思われていた息子が、い

ま、「音楽という言葉」を駆使して、父の言葉を越えた美しく清らかな表現世界を紡ぎ出し始めた。ということは、常に自己＝弱者（父＝息子）であり続けた彼の前に、「音によって語る」という新しく引き受けねばならぬ部分が出現してしまったことであり、新事態の出来にいささかならず戸惑いを感じているというのが実情ではないか。「息子の大きさ」とは、「作曲家としての成功」という現実的価値によってではなく、「弱者」と分類されてきたものたちの従来の理解を越える新しい側面の発見において、自身の狭隘さが自覚された結果の発言と解さるべきものと思う。言葉を替えれば、異質の他者として懸命に理解し、弱者として保護と共生を模索してきた障害児のなから、沸々と湧き起こってきた新しい呼びかけ、その呼びかけに対して、既得の知性や感性に掬め捕られた大人として、即座に対応し兼ねている状態と見ることも可能だろうか。

大江氏の最近のエッセイのなかの次の挿話は、この間の父と子のずれと、そして父の戸惑いとを、ものの見事

に語り得ていて絶妙であった。すなわち、息子の将来に關して、音楽家としての夢を問いかけた父に対して、息子は、長い沈黙の末に、「紙は何枚残っていますか」と答えたと言っているのである。光氏にとって、五線紙に音符を記す自分の営みは、世間一般で言うところの「作曲を仕事とし、音楽家として生きる」という位置付けとは、いささかも繋がりが得ないものであるらしい。当の本人にとって、曲で語ると言う試みは、苦しみと同時に静かで小さな喜びの源泉ではあるだろう。しかし、俗に言うところの「成功・成就」など言う語とも、あるいは、「将来の生業」などという觀念とも、大凡、無縁であると言うことだ。父の問いは、こうした息子の言葉で、避け難く大人としての通俗性を際立たされる。芹沢俊介の言を借りて「息子はこの問いの硬直性を子どもという場所から鮮やかに解体している」（「ウォッチ論潮」朝日新聞一九九四、十一、二十九日夕刊）と言うことも可能かも知れない。

障害児とか、弱者とかいう言葉を、川本・芹沢氏らに

做って「子ども」と置き換えてみよう。私どもが、子どもについて語るとき、しばしば、そして安易に口にするのが、「子どもの素晴らしさ（価値）」とか「未来を担う（可能性）」とか言うそれであろう。そして、子どもに学べとか、子どもの尊さ・大きさに気付けなどと説かれるとき、その「尊さ・大きさ」という言葉は、どのようなニュアンスのものとして流通しているのだろうか。もしかしたら、私どもはその時、「現在は弱小ながら、将来は素晴らしくなるのだから」とでもいう、いつか成就されるであろう生産的価値の幻想に、無自覚ながら撈め捕られているのではないか。とすれば、それは、大江父子の「作曲家的成功」をめぐるやりとりと同様のずれをばらんでいようし、同じ滑稽さを露呈してもいよう。

「子ども」という異質の他者との取り組みにおいて、私どもは、日々、彼らの異化する言動に戸惑い混乱させられる。時には、理解を越えた彼らの表現に絶望することすらあり兼ねない。とりわけ、現代という不透明な時代に、子どもを育てることの困難さには、言葉を絶するも

のがある。しかし、子どもという同化し難い者たちとの共生の過程で、その困難さに絶望しつつ、絶望の中にも希望があると気付かされることも多いのではないか。私どもは、瞬時感じられるこの機会に聴くことが必要だろう。

十年という時間を経て、今、大江作品は、栄光の光りに包まれている。それを改めて見直したとき、私に呼びかけてきたのは、前と変わらぬ「絶望のなかに希望を見る」ことに賭ける大江世界の魅力であった。十年間、携わってきた本誌編集の業務から、私は、今月で離れようとしている。時の話題にからめつつ変わらぬものを押さえ直したこの一文で、任を終えたご挨拶に替えさせて頂きたいと思う。

（お茶の水女子大学）